ゼロの使い魔～使い魔はつながりの守り人～

アカネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔～使い魔はつながりの守り人～

【Ｎコード】
Ｎ１１０９Ｒ

【作者名】
アカネ

【あらすじ】
世界を旅する青年は魔法世界で少女の使い魔となった。
彼は彼女のつながりを守れるのか。

真・恋姫無双～つながり伝～の続編です。
主人公の事を知らない人は、前作を見てください。

つながりの使い魔（前書き）

何となく書きました。

まだ恋姫も終わってないのにすいません。

読んでもらえると嬉しいです。

では、どうぞ。

今茜の前には一人の少女がおりその少女が突然茜に質問してきた。

少女「（あんた誰？）」

※回想

茜「また荒野ですか……」

恋姫の世界を旅立った茜は別の世界に来た。だが、でた場所はまた荒野だった。

茜「今回は一人ですからね……」

そう、実はロボガミや兄弟は訳あって前の世界に置いてきたので今回は茜一人である。

茜「とりあえずここはどこで…ん？」

茜が周りを見渡すと、あるものを見つけた。それは…

茜「鏡？」

高さは二メートルほどで幅は一メートルほどの楕円形をしている光る鏡だった。明らかに荒野には場違いな雰囲気を作り出している。

茜「何なのでしょうか？これは…」

何なのか不思議に思いながらも茜は鏡に触れて見た。すると、手が鏡の中に入っていった。

茜「ん？抜けません」

だが、茜は手を抜こうとしても全く抜ける気配がなかった。それどころか少しずつ引き込まれている。

茜「仕方ないですね、押して駄目なら引いてみろといいますし、抜けないならいっそのこと入ってみますか…」

茜は手を抜く事を諦めて鏡の中に入っていった。それと、その理屈は少しおかしいぞ茜…

しばらくすると茜は妙な場所に出た。そこには周りが複数の人が囲っており自分の前には桃色の髪の少女とその近くに明らかに可哀想な頭の中年の男がいた。

少女「（あんた誰？）」

※回想終了

そして現在に至る。

茜「此処は、どこなのでしょう？」

茜が周りの様子を窺（うかが）っていると、先程まで正面に立っていた少女が中年の男性に向かって、騒ぎ出した。

少女「（コルベール先生、お願いします。召喚の儀式をやりなおさせてください！）」

中年「（それは無理です。『サモン・サーヴァント』は神聖な儀式。たとえ召喚したのが何であろうとも、召喚のやり直しを行う事は認められません）」

少女「（でも、平民を使い魔にするなんて聞いた事がありません！）」

何か話をしているようだが、言語が違う為か茜は何を言っているのかさっぱり分からない。
すると、今まで静かだった周りの子供たちも騒ぎ出す。

少年Ａ「（ゼロのルイズが平民を召喚したぞ）」

少年Ｂ「（サモン・サーヴァントを成功させる自身がないからって、その辺の平民を連れてくるなよなー）」

どうやら少女を笑いながら囃し立てているようだ。状況が掴めずに、呆然としていた茜の元に、先程騒いでいた少女が近づいてくる。

少女「（あ、あんた、感謝しなさいよね！貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから）」

今度は、茜に向かって話しているようだが茜は何を言っているのか当然判るはずがない。

茜「こんにちは、お嬢さん。私はそちらが何を言っているのか何一つわからないですが、こちらの言っている事はわかりますか？」

少女「（っ！！！ああー、もう！！何を言ってるのかさっぱりじゃない！言葉も通じないとか、一体どこから来たってのよ！この平民は！！！）」

少女は大層ご立腹のご様子だ。どうやら、向こうにも茜の言語は理解出来ないらしい。

少女「（ちょっと、あんた。そのままだと契約出来ないじゃない！！とりあえず、しゃがみなさい！）」

茜「？」

少女がまた茜に話しかける。服の袖（そで）を強く引っ張るところ座れと言っているらしい、茜は少女に促されるままにその場にしゃがみこんだ。すると茜は少女と目が合った。

茜「（ニコ）」

少女「っ！！／／／」

茜は何気なく微笑むと少女は顔を赤らめたが直ぐに気を取り直した。

少女「（我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え我の使い魔と為せ！）」

少女が独唱を終えると、突然押し付けるように口づけをされた。茜自信は特に気にしていない。

茜「ん？」

急に左手と右手の甲に痛みが走る、だが茜は特に痛がる素振りを見せず視線を手の甲に向ける。すると見た事のない文様が浮かび上がっている。

茜「これは、何でしょうか？」

少女「『使い魔のルーン』が刻まれているだけよ。すぐ終わるわ」

茜「ん？」

茜は今までまったく通じなかった言葉に返事がある事に反応した、先程の少女がそっぽを向き横目で茜の様子を窺っていた。照れているのか、顔が真っ赤だ。

茜「言葉が通じるようになったようですね」

少女「あら、ホントね。契約したからかしら」

茜「……『使い魔のルーン』、『契約』、何だか面白そうですね、色々と聞きたい事があります」

茜が少女に尋ねようとした所で、先程少女と話していた中年の男性が茜たちに声をかけた。

中年「どうやら無事に、『コンタラクト・サーヴァント』は成功したようですね。質問には、私がお答えしましょう」

茜「貴方は？」

中年「私はここ、トリステイン魔法学院で教師をしている。ジャン・コルベールと申します」

茜「（魔法ですか）私は鏡に入ったら此処に出たんですが、それは何故ですか？」

コル「それは、「私があなたを、使い魔として召喚したからよ」ミス・ヴァリエール」

茜「使い魔…従者の用なものですか？」

コル「そんなところです」

茜「なる程、分かりました。貴女の使い魔になります」

コル「よろしいのですか？」

茜「どうせやることなどありませんので、それになんだかたのしそうですので♪」

従者になることを楽しそうと思える茜はある意味、大物である。

茜「というわけで私は貴女の使い魔となりました」

少女「ふん！当然じゃない！もう契約だってしてるんだから！」

茜「その事ですが、契約とは先程の口付けのことですか？」

少女「そうよ、何か文句あるの？」

茜「当然です、あの感じからして貴女は初めての筈です。初めては好きな殿方のためにとっておくべきですよ」

少女「……はあ？」

思わず少女は惚けた声を上げる。

少女「あ、あんたいきなり、なにいってんのよ！？」

茜「いきなりなのはそちらです。貴女は可愛いんですから、大事にしなくてはいけません」

少女「か、かわっ！？／／／」

少女はあたふたとしながら声を上げる。

少女「よ、よけいなお世話よ！！これは儀式なんだから、数に入れないものなの！！」

茜「そうなんですか？」

少女「そうなの！！あ、あたしはまだ、大事に取ってるんだから！！」

茜「ならよかったです」

それを聞くと茜は嬉しそうに微笑んだ。

少女「っ！！／／／」

少女は再び顔を赤らめる。

茜「では改めて自己紹介です。姫神茜、それが私の名前です」

少女「ヒメガミ・アカネ……変わった名前ね、私はルイズよ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、使い魔なんだからご主人様かルイズ様と呼びなさい」

茜「ではご主人様と呼ばせてもらいます。これからよろしくお願いしますご主人様」

茜は再び微笑んだ。

ルイズ「っ！！／／／／」

そしてルイズは再び頬を赤らめて茜から顔を逸(そ)らした。するとコルベールが興味深そうに茜の手を見ている。

コル「珍しいルーンですね、それに二つですか。写さしてもらっても宜しいですか？」

茜「はい、どうぞ」

茜の返事を聞くと、コルベールは文様を真剣に写し始めた。

コル「よし、写し終わりました」

茜から離れたコルベールは周りにいる生徒達に呼びかけた。

コル「これにて、サモン・サーヴァントを終了します。各自、教室に戻ってください」

そう言われると、生徒達は空に浮かんで全員ある建物の方に向かって飛んで行った。

少年D「ルイズ！お前は歩いてこいよ！」

少年E「あいつ、『フライ』どころか『レビテーション』さえまともに使えないからな」

少女C「その平民、あんたにはお似合いね」

茜「（フライ…レビテーション……あれが魔法ですか）」

ルイズ「……」

ルイズは肩を震わせながら俯いている。先程言われた事がショックだったのだろう……

茜「（少しお仕置きしますか）『コンファイン』」

茜がそう言うとルイズを馬鹿にした生徒達のフライが乱れ、落ちた。

ルイズはそれに驚き、茜の方へ振り向く。

茜「ちょっと仕置きをしておきました」

ルイズ「あんた、なにしたの！」

茜「魔法を打ち消しただけです、詳しくは後で説明しますので私達も行きましょう」

そう言って茜は学院へ歩いていった。

ルイズ「ちょっと、まちなさいよー！」

そう言って茜は学院へ歩いていった。

ルイズ「ちょっと、まちなさいよー！」

そしてルイズは茜を追いかけて行った。

【コンファイン】

視界に入れた攻撃や特殊な力を無効化する力。無効化出来ないのは同じつながりの力だけ。

つながりの使い魔（後書き）

という感じです。

ルイズはこれで合ってるでしょうか？少し不安です。

あと、茜を他の世界にもいかせるつもりです。その時は受け止めてください。

後、行かせたい世界で希望があったら言ってください。

規格外な使い魔（前書き）

書くの遅くてすいません。

一応頑張ってるつもりなんです。

それと皆さんに聞きたいことがありますので読んだ後、後書きをみてください。ただ、ネタバレですのでいやな人は見ないでください。

では、どうぞ。

規格外な使い魔

ルイズ「それ本当？」

夜、ルイズの部屋に招かれた茜は、召喚される以前は何をしていたのかを話した。案の定、ルイズの反応は「信じられない」といったものだった。

ルイズ「世界を旅してつながりを守る……お伽噺じゃあるまいしとうてい信じられる話じゃないわね」

茜「でしたら先程の能力についてはどう説明しますか？」

ルイズ「それは……何かの魔法とか」

茜「でしたらあのような魔法はこの世界にありますか？」

ルイズ「…無いわね……それで、あれは何なの？」

茜「あれはコンファインと言って視界に入れた魔法や特殊な力を打ち消す能力です」

ルイズ「魔法を打ち消すって…そんな魔法聞いた事ないわ」

茜「魔法ではなく私の能力なので、それとこちらも聞きたいことがあります」

ルイズ「何よ？」

茜「使い魔とは何をするんですか？」

ルイズ「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

茜「？どういう意味ですか？」

ルイズ「使い魔が見たり聞いたりしたものを主人も知る事が出来るのよ」

茜「便利ですね」

ルイズ「でも、あんたじゃ無理みたいね。私、何も見えないもの」

茜「そうですか…」

茜は自分が役に立てない事に少し落ち込んだ。

ルイズ「それから、使い魔は主人の望むものを見つけて来るの。例えば秘薬とかね」

茜「どういうものですか？」

ルイズ「特定の魔法を使う時に使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか」

茜「でしたら2、3日時間があればこの世界の知識を頭に入れられるので大丈夫でしょう」

ルイズ「2、3日でいいの？」

茜「はい、それと秘薬の用途しだいでは私の能力で代用出来ると思います」

ルイズ「例えば？」

茜「怪我や難病を直す類なら殆どは大丈夫ですね」

ルイズ「それ本当！？」

するとルイズが血相を変えて聞いてきた。

ルイズ「本当に！本当ぉ～にッ！！どんな病気でも治せるのねッ！？」

茜「今まで失敗した回数は一割以下ですので余程でなければ大丈夫でしょう」

ルイズ「それじゃ困るのよッ！！絶対治してもらわなくちゃならない人がいるんだからッ！！」

茜「生憎、私は有能ではありますが万能ではありません、出来るか出来ないかは場合によります」

ルイズ「そう…なら明日の朝、早速休学届けをだすからあんた、明日私の実家に来なさい！」

茜「別に構いませんがそんな直ぐに休学手続きを申請出きるんですか？」

ルイズ「うぐ…なら3日後にするわ」

茜「わかりました、ところで誰を直すんですか？」

ルイズ「私には、二人の姉がいるんだけど、その下の姉……カトレアのことよ。私は、『ちい姉様』って呼んでるの。ちい姉様は、昔から身体が悪くて……とっても綺麗なのに、社交界にも出られなくて……。お父様が国中から高名な水のメイジを呼んで、治療しようとしたんだけど……全然治らないのよ」

茜「なるほど……わかりました、私の出来る限り最善を尽くします」

ルイズ「ありがとう、そしてこれが一番なんだけど…、使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！」

茜「それに関しては制限によります」

ルイズ「制限？」

茜「はい、私は世界を移動する時その世界によって力を制限されるんです。強すぎる力の先は破壊以外ありませんので」

ルイズ「そう、本来の力ならどのぐらい強いの？」

茜「ドラゴンぐらいなら瞬殺できますね」

ルイズ「どんだけ強いのよ！」

茜「規格外ですので、ですがこの世界での制限からして問題ないと思います」

ルイズ「わかったわ、でも戦う事なんてそうないと思うから掃除、洗濯、その他雑用を任せるわ、ふわあ…長々しゃべったら眠くなって来たわ」

そう言うとルイズは突然着替えだした。普通なら慌てるか興奮するだろうが茜は全く気にしない。

ルイズ「それ、明日になったら洗濯しといてね」

そう言ってベッドに置かれた下着を指す。

茜「わかりました、ところで私はどこで寝ればよろしいですか？」

ルイズ「そこよ」

ルイズは部屋の隅を指差した。そこには、犬の寝床のように藁が敷

き詰められていた。

茜「わかりました。では、これをどかしてこの一角に空間を作ってそこで休ませてもらいます」

ルイズ「ふーん…。って!?あんた空間まで作れるの!?」

茜「はい。入り口は小さいですが中々快適です♪」

ルイズ「…もういいわ。あんたが規格外だってのは十分わかったから。」

茜「はい。お休みなさいませ、ご主人様」

ルイズ「はいはい、お休み」

その後、茜は空間を作って眠った。

翌日

茜は目覚めた後、ルイズの下着洗うために外に出たのだが…

茜「そういえばどこで洗うのでしょうか?」

見事に迷ってしまった。

?「あの、どうかなさいましたか?」

茜「ん?」

茜が振り返ると、そこにはメイド服を纏った黒髪の少女が立っていた。

少女「何かお困りの様に見えますが…」

茜「はい、洗濯を頼まれたのですが洗い場の場所がわからないんです」

少女「洗濯?もしかして……あなたがミス・ヴァリエールの使い魔さんですか?」

茜「知ってるんですか?」

少女「はい、ミス・ヴァリエールが平民の使い魔を召喚した事は私

達の耳にも届いてますから」

茜「そうなんですか……あ、申し遅れました。私は姫神茜と申します、茜とお呼びください」

少女「私はシエスタと申します。あの、もしよろしければ私が洗い場までご案内いたしますけど」

茜「ありがとうございます」

その後、茜はシエスタに案内されて洗い場に到着した。

シエ「ところで、何を洗濯されるのですか？」

茜「ご主人様の下着です」

そう言って茜が下着を見せると、シエスタの表情が固まった。

シエ「そ、それは……」

茜「？どうしましたか？」

シエ「あ、茜さん…よければ私が洗いましょうか？」

茜「え？よろしいんですか」

シエ「男性の下着とは勝手が違いますので」

茜「それもそうですね、お願いしてもよろしいでしょうか？」

シエ「はい」

茜は洗濯を任せる事にした。シエスタの手際は鮮やかで、洗濯はあっという間に終わってしまった。因みに茜の方がスキルは高い。

茜「本当にありがとうございました。シエスタのおかげでご主人様に怒られずに済みました」

シエ「そ、そんな、これくらい当然ですよ」

照れるシエスタにもう一度礼を言い、茜はルイズの部屋に戻った。

ルイズ「うにゅ……」

案の定ルイズは寝ていた。昨日はずっと難しい顔をしていたからわからなかったが、今は年相応のあどけない寝顔を見せている。

茜「（やはり可愛いですね、これなら十年後には絶世の美女ですね、少し楽しみです♪）朝ですよ、ご主人様」

ゆさゆさ

妙な事を考えながらも、茜は声をかけながらルイズの体を優しく揺すった。

茜「ご主人様、朝ですよ起きてください」

ゆさゆさ

ルイズ「う、ううん……」

数回繰り返すと、ルイズはゆっくりと目を開けた。

茜「おはようございますご主人様」

ル「おはよう……って、あんた誰よ！？」

茜「私は昨日ご主人様に召喚された使い魔です」

ルイズ「え？あ、そっか……」

ルイズはあくびをしながらゆっくりと起き上がった。

ル「服」

茜「どうぞ」

椅子にかかった制服ルイズに渡す。

ルイズ「下着も取って。そこのクローゼットの一番下に引き出しに入ってるから、その後は私に服を着せてちょうだい」

茜「はい」

茜は言われた通りクローゼットから下着を取り出してルイズの着替えを手伝う。下着を着せるあたりで、茜はルイズと目があった。

茜「（ニコ）」

ルイズ「／／／…いい！！やっぱり自分で着替えるから！！」

茜「そうですか？では私は外でお待ちします」

そう言って茜は部屋を出て行った。しばらくすると着替え終えたルイズと同じタイミングで別のドアが開き、中から大きな胸の赤い髪の少女が姿を現した。

少女「おはようルイズ」

ルイズ「おはよう。キュルケ」

ルイズは顔をしかめながら挨拶する。

少女「あなたの使い魔って、それ？」

少女「あっはっは！ほんとに人間なのね！すごいじゃない！」

少女が茜を見ながらバカにしたように言う。

茜「ご主人様。褒められましたよ」

ルイズ「バカにされたのよ！！！」

茜「？すごいとは褒め言葉ですよね？」

首を傾ける茜。

少女「……ルイズ。その平民、頭足りてるの？」

茜「失礼ですね、私は頭は悪くありません。少し頭の大切なネジが緩んでるだけです」

ルイズ「それって自分で言う事？」

寧ろ、ある意味余計にたちが悪い。

少女「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発で呪文成功よ」

ルイズ「あっそ」

少女「折角だから見せてあげるわ。フレイム～」

少女は、何やら自慢げな声で使い魔を呼ぶ。すると、部屋からのそりと赤いトカゲが現れた。

茜「トカゲ？」

少女「もしかして、あなたサラマンダーを見るのは初めて？」

茜「なるほど、これがサラマンダーですか」

ルイズ「ふぅーん。あんたの使い魔、サラマンダーなのね」

少女「そうよ。素敵でしょ。あたしの属性にぴったり」

ルイズ「あんた『火』属性だもんね」

少女「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも男の子はそれでイチコロ。あなたと違ってね？」

キュルケは得意そうに胸を張った。ルイズも負けじと胸を張るが、メロンとまな板では勝負にならない。しかし、ルイズはそれでもキュルケを睨み付けた。どうやらかなりの負けず嫌いらしい。

ルイズ「あんたみたいにいちいち色気振りまくほど、暇じゃないだけよ」

ルイズの言葉に少々はにっこりと笑った。余裕の態度だ。

サラ「きゅるきゅる」

茜「なる程、貴方はフレイムと言うのですね？私は茜と申します」

一方、茜はサラマンダーのフレイムとなにやら話している様子。

フレ「きゅるきゅる」

茜「へ～、それは大変ですね」

二人「……何してるの？」

茜「ん？」

ふと気が付くと、二人はいつの間にか言い争いを止めて大人しくなっていて、
戸惑った表情で茜に問いかけてきた。

茜「フレイムさんとお話してたんですけど、ダメでしたか？」

二人「な、なんですって～～～～！！！」

フレイムと会話しているように見えた茜の態度を疑問に思っての質問だったが
予想はドンピシャで当たっていたようだ。その事に驚きを隠せない二人。
本来、使い魔は基本的に人語を話せない。一部の韻竜などの高等な知恵を持つ者か、この学院の学院長、オスマンのように人外のメイジが使い魔の言葉を翻訳するしか使い魔の言葉を正確に理解する事

は出来ないのだ。

ルイズ「あんた、サラマンダーの言葉がわかるの！？」

茜「そう言えばわかるみたいですね」

少女「そ、それじゃフレイムは何て言ったのか教えてくれる？」

茜「はい、自己紹介を少々、それと此処の生徒に香水を使っている生徒がいて、その香りがフレイムさんにはきついらしいです」

少々「香水？モンモランシーのことかしら？」

どうでもいいところに食いついている少々をよそにルイズはまだ驚いている。

それを悟った茜はルイズに言った。

茜「ご主人様、お忘れですか？私は規格外なんですよ」

それを聞くとルイズは何故か納得した。

ルイズ「でも、凄いわ！」

少々「本当に凄いわよ、ヴァリエール！もし使い魔が人間の言葉を話せたらって言うのは、メイジにとって夢のような話だもの。韻竜

みたいな人語を操る使い魔なら通訳は可能だけど、滅多に居ないんだから彼の能力は凄く役に立つと思うわ！あなたの使い魔だってのが非常に癪だけど…」

ルイズ「そうよね！普段は雑用ぐらいに使い道は無いと思ってたけどもしかしたら茜ってば大アタリな使い魔かも」

少々「「かも」じゃなくてアタリだと思うわよ…ところであなたのお名前を教えて頂けないかしら？私はキュルケ。キュルケ・フォン・ツェルプストーよ」

茜「よろしくお願いしますキュルケ。私は姫神茜です。アカネとお呼びください」

キュ「わかったわ。それにしても変な名前ね……まあいいわ、それよりヴァリエールの使い魔なんかやめて私の所に来ない？」

そう言ってキュルケは茜に腕を絡めた。どうやら欲しいらしい。

ルイズ「ちょっとツェルプストー！人の使い魔にちょっかい出すんじゃないわよ！！」

キュ「ただのスキンシップじゃない。まったく、そんな小さい事にこだわるから胸も小さいのよ」

ルイズ「む、胸は関係ないでしょ！！」

キュ「あら、殿方だって大きい方が好きに決まってるわ。でしょア

カネ？」

茜「そうでしょうか？一人一人の個性の問題ですし、少なくとも私はそういう事は気にしません」

ルイズ「そう！その通りよアカネ！」

キュ「ふうん…面白いわねあなた」

茜「何がですか？」

キュ「何でもないわ。それより早く行きましょう。急がないと間に合わないわ」

茜は半ば引き摺られるようにキュルケについて行く。その後ろにフレイム、さらにその後ろをルイズが追う。

ルイズ「ちょっと！私を置いて行くんじゃないわよ！！」

規格外な使い魔（後書き）

という感じになりました。

それとネタバレになりますがギーシュ決闘イベントの時に恋姫キャラを出すつもりです。

希望があったら参考にしますので言ってください。

お知らせ

どうも、作者の茜です。

突然ですが、明日から携帯を解約する事になる「かも」しれないので続けられなくなるかもしれません。

駄文ながらも呼んでくれた方は大変申し訳ありません。

１４日になってもこのお知らせが消去されていないか、この小説事態がなくなったら解約したと判断してください。

また携帯を買えたら、同じ作者名で再び書かせて貰いますので、その時は駄文ながらもまた読んでください。

今までありがとうございました。

では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1109r/

ゼロの使い魔～使い魔はつながりの守り人～

2012年1月12日22時48分発行